

疾走中に生じた遠位大腿二頭筋腱皮下断裂の2例

鈴鹿回生病院 整形外科
加藤 祥 福田亜紀 藤井 渉 藤澤幸三
三重大学スポーツ 整形外科
西村明展 加藤 公

【症例 1】

20歳女性。トレーニング中、ダッシュをした際に、右大腿後面に激痛が出現し受傷後10日目に当院紹介。右大腿後外側部に腫脹、大腿二頭筋腱はレリーフが消失し、同部位に圧痛あり。MRI T2強調像にて右大腿二頭筋の筋腱移行部に高信号領域を認め遠位大腿二頭筋腱皮下断裂と診断し、腱縫合手術を施行。術後4週より部分荷重、術後6週で全荷重開始し、現在競技復帰している。

【症例 2】

15歳男性、体育祭のリレーの際、左回りのカーブで左足を踏ん張り、左大腿後面に激痛を自覚。当院外来受診。左大腿遠位外側に腫脹、大腿二頭筋腱はレリーフが消失、同部位に圧痛あり。MRI T2強調像で左大腿二頭筋遠位、部に高信号域と腱の途絶像を認め、遠位大腿二頭筋腱皮下断裂と診断し、腱縫合術を施行。症例1と同様術後4週より部分荷重、術後6週で全荷重開始し、現在経過良好。

【考察】

大腿二頭筋は膝関節屈曲、股関節伸展、下腿内旋などの作用を有する。また長頭は二関節筋であり、肉離れが最も発生しやすいとされる。受傷機転としては、大腿二頭筋の肉離れでは着地時や蹴り出し時など疾走中の遠心性収縮により発生する。一方自験例遠位大腿二頭筋腱皮下断裂では股関節屈曲位での前頸姿勢で膝関節の伸展が強制されたため生じたと考える。治療法としては、過去の報告では保存療法では成績不良例が多く、ほとんどが手術療法が選択され、良好な成績でスポーツ復帰を果たしている。自験例でも症例1ではスポーツ復帰を果たしており、良好な成績を示した。